

授業における基礎的条件に関する一考察

～学生間の人間関係から～

大森宏一

OOMORI Kouiti

本稿は、保育者養成校における授業の基礎的条件に関する授業実践の紹介とその考察を行ったものである。特に演習や実技を伴う授業の場合、学生間の人間関係が授業の質に大きく関係していると思われる。今回は、学生間の人間関係をよくすること、あわせてコミュニケーション能力を向上させること、自己覚知を促がすことを目的として授業実践を行った。授業では「名刺交換」というワークを用いて任意の1対1の関係を作り考察を試みた。

本学に入学して、2年目(専攻科については3年目)の後期であるがこれまであまり話をしたことがない学生が半数以上おり、限られた範囲での人間関係しか構築していないことが明らかになった。また今回の授業によって人間関係がよくなったと考えられる回答が8割を超えた。今後はさらに早い時期から基礎的条件づくりに取り組み継続させる方法を考えていくことが大切である。また学生は人間関係をつくるのが苦手であること及びコミュニケーション能力が低下していることを踏まえて授業を実践する必要があると思われる。

キーワード：授業の基礎的条件、コミュニケーション能力、学生間の人間関係、自己覚知
みた。

1. はじめに

同じ授業をいくつかのクラスで同じような進め方で行った際、「やりやすい」と感じるクラスと「やりにくい」と感じるクラスがある。これは教員であればほとんどが経験をしたことがあるのではないかとと思われる。この授業の「やりやすさ」とはどのようなものであるかを考えた場合、授業の基礎的な条件が大きく関係していると思われる。当然、担当教員の資質や能力も関係が大きい。同じ教員が担当している場合においては、学生間の人間関係も授業の質に関係していると思われる。

本稿では、授業の基礎的条件である学生間の人間関係とコミュニケーション能力^{注)}について考察を試

日本学生支援機構の調査¹⁾では、約8割の大学等において「対人関係(家族、友人、知人、異性関係)」に関する相談内容が増加していると回答しており、現在の学生がいかに人間関係について悩んでいるかがわかる。また日本経団連²⁾によると、企業の採用選考にあたって特に重視した点として第1位(7年連続)にコミュニケーション能力を挙げている。学生を採用する側にとっては学生の知識や技能、専門性の前にコミュニケーション能力を重視しておりいかにその能力が大切かということとその能力の低下が顕著であることがうかがえる。

短期大学(保育士養成校)の授業においても、学生のコミュニケーション能力の不足や低下および学

生同士の人間関係が希薄であることが授業の「やりにくさ」の原因の一つであると思われる。

「社会福祉援助技術」「保育相談支援」の授業のように「人と関わることによって感じ、学ぶ」という演習を主とした授業では、学生同士の人間関係が「授業の質」を大きく左右すると考えられる。高橋(2010)は良い授業の条件として、「基礎的条件」と「内容的条件」の2重構造によって成り立つと述べている。³⁾

本稿では学生間の人間関係において「基礎的条件」に着目して検証を試みた。これは、内容的条件は基礎的条件を満たしたうえでこそ授業の目的・学習内容・ねらいが評価されると言えるためである。さらに「基礎的条件」は、授業の目標や内容、方法や形式に関係なく他の多くの授業に要求される条件であると考えた。

高橋(2010)⁴⁾は、良い授業について「授業の勢い」があり「雰囲気が良い」ことであると述べている。「授業の勢い」とは学習規律(学ぶ姿勢)・マネジメント(学習時間の確保)が整っていることであり、「雰囲気が良い」とは学習者が情緒的に開放されていて、学習者同士が肯定的な人間関係に支えられていることである。特に雰囲気をよくするための情緒的な開放や肯定的な人間関係は、学習者同士が何気ない話ができる関係にあるか、またそのような関係を作ってきたかということが関係する。

特に、実技や演習形式など学生同士がお互いにかかわりながら授業を行う形式では学生同士の人間関係が良い授業であるかどうかという「授業の質」に大きく関係していると思われる。

ここでは、演習をともなう授業において学生同士の人間関係とコミュニケーション能力について「名刺交換」というワークを用いて考察した。さらに授業の内容についてその効果を検証した。

普段の学生の様子から「非常に限られた少ない友達関係の中でしか自分のことを話す、友達のことを聴くという経験をしていない、またコミュニケーションをとるのが苦手である」という仮説のもと研究

を進めた。

さらに、実際の授業では、一人でも多くの学生と話をしたり聴いたりすることによってコミュニケーション能力を向上させ、より肯定的な人間関係をつくるきっかけづくりを目的として授業を進めた。

2. 方法

調査期間：平成24年11月5日～29日

調査対象：保育職志望の短期大学2回生73名

専攻科生41名 合計114名

授業科目：保育相談支援(2年)

社会福祉援助技術(専攻科)

授業のねらい：1対1でのかかわりにおいて人の話をよく聴く、自己開示をして自分のことを話す。肯定的な人間関係をつくりコミュニケーション能力の向上をはかる。またこれらのワークにより、「自己覚知」につなげる。

さらに、話をするときの互いの位置関係も、将来保育職(保育相談・対人援助する際)に就く場合の参考になるようにL字型をとるように座席を配置して面談及び相談援助の疑似体験とした。

授業の進め方：

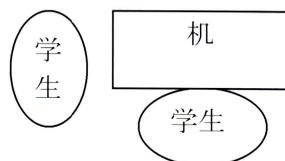
①一人7枚の名刺を作成する。(事前の授業、約30分)

図1 名刺の内容(例)

○○幼稚園(就職予定・希望の園など)
名 前
趣味・特技など

②1対1で話ができるように座席の指定をする。

図2 座席配置図



L字型での対話であるが、学生同士は並列の関係を基本とした。(カウンセラー役とクライアント役ではない)

③名刺交換の開始

- a、互いに挨拶をして名刺を交換する
 - b、名刺の記述内容、趣味、特技、将来の夢、友達、異性、TV番組、音楽、映画、スポーツ、「こう見えて実は私〇〇なんです」など（上記は板書き説明を加える。）をきっかけとして話をする
 - c、さよならの挨拶をしてメンバー交代する
- ④5分間で順次交代をする(合計7名と話をする)
- ⑤通常の座席に戻り、振り返りシートを記入する
振り返りシートの内容：
- a、名刺の内容：「こんな名刺を作りました」
 - b、ワークで感じたこと・授業の感想
 - c、友達について(話をしてわかったことなど)
- 上記3つの項目について、自由記述で記入できるようにシートを作成した。

述があるもので今回の授業においてこれまであまり話をしたことがないと思われる学生を累計した。

	学生数	これまであまり話をしたことがないと回答した学生数	
専攻科	41名	21名	51.2%
2年生	73名	42名	57.53%
総計	114名	63名	55.26%

分析調査の方法と研究の限界について：

調査は振り返りシートの記述及び授業の様子から多角的に解釈した。ただし、この授業研究は、情緒的な開放という側面を持っているため比較的自由的な雰囲気の中で演習ができるように心掛けた。そのため記述には信憑性に欠ける部分もあり限界があることを付け加えておく。さらに同じクラスであるかどうか、過去の人間関係がどうであるか、などについては配慮せずに学籍番号順を基本に組み合わせを決めたため偏りがどの程度あるかは不明である。

今回の調査では、半数以上の学生が名刺交換をしてこれまであまり話をしたことがないと思われる記述をしている。2年生の中には、「初めて話す子がほとんどでした」「初めて話す子ばかりだった」という記述もあり（2名）人間関係の希薄さが目に付いた。今回の結果のように「これまであまり話しをしたことがない学生」が多い中で、「情緒的に開放された肯定的な人間関係」の中で授業を行っているという状況は考えにくい。

3. 結果と考察

①振り返りシート(授業の感想・友達について)の記述の内容を下記の視点でまとめた。

今まで挨拶や自己紹介などあまり話をした経験がないと思われる記述を集計した。

ワードとして：初めて話をした、話をしたことがない人と話をした、初対面、普段話をしない人、しゃべったことがない人、1回もしゃべったことがない人、知らない人、あんまり話したことがない、という記

エピソード①学生との会話のから：

実習指導において、同じ実習先に行く学生はクラス、学年を超えて連絡を取るよう促した。そうすると上級生である専攻科の学生から、「それは難しいです」との答えが返ってきた。本学は本年度より児童教育学科単一であり、授業クラスを見て教室に行き誰かに聞けばすぐわかると思うが、そのことを伝えると「そんなことは無理」であるという。広大なキャンパスの中の何百何千人という学生の中から探すのではなく単一学科で教室も限られた中でのことであるが、「声がかけれない」ということであった。

エピソード②専攻科における通常の座席から見た人間関係から：

専攻科生は座席を自由にしている。しかし座席の位置を見ると、学期を通して、毎回ほぼ決まった座席に学生は着席し授業を受けている。また、いつもの席に座っていない場合、人間関係において変化（かかわりを避けて距離を置くケース）があった。筆者の知る限りでは、4名の学生が該当した。

筆者が今年度体験した2つのエピソードからも目の前にいる学生や近くにいる学生とのコミュニケーションを苦手とする者がいると考えられる。しかもごく限られた人間関係の中で学生生活を行っているように思われる。

「非常に限られた少ない友達関係の中でしか自分のことを話す、友達のことを聴くという経験をしていない、またコミュニケーションをとるのが苦手である」という仮説から検証を試みたが、振り返りシートや普段の様子から同じ結果が得られたと考えられる。

②振り返りシートにおいて、人間関係がよくなった、またはポジティブになったと考えられる記述。

ワードとして：楽しかった、よかった、喜べた、話せるようになった、話せてよかった、話してくれてうれしかった、話してみたい人と初めて話すことができた、たくさんの人と関わってよかった、盛り上がった、ステキだった、一致したときが本当に楽しい、しあわせな会話ができ、話したら笑顔がかわいかった、新鮮で楽しかった、普段以上にヒートアップする、仲良くなれた、話が弾んだらたくさん話せた、いい感じに話し合えた、新たな発見があった、気の合う人がいた、こんな機会があるのは良い、5分間アツという間だった、笑顔で話せると話しやす

い、いろいろ知ることができた、共感した、上記のワードを含み今回のワークを行うことにより人間関係がポジティブになった、また今後の関係が良くなると思われる記述を累計した。

	学生数	人間関係がポジティブになったと思われる回答した学生数	
専攻科	41	34	82.93%
2年生	73	58	79.45%
総計	114	92	80.70%

全体として、80%を超える学生がワークを行った結果、人間関係がポジティブになったまたは今後の関係が良くなると思われる記述をしている。今回の「名刺交換」というワークをおこなうことによって肯定的な人間関係のきっかけづくりになったと考えられる。このような機会を使って人間関係を作り上げていくことが必要であると感じた。

そのほかの記述において：

学生	記述内容
A	「人見知りだから普段あんまりしゃべらない子としゃべるときちょっとしんどかった。苦笑のせいで顔の筋肉痛い、 <u>意外な一面が知れた・あまり仲の良くない人としゃべると苦笑いになる</u> 」
B	「 <u>やっぱり人見知りスイッチON</u> でした、4月から社会に出るので人見知り少しぐらいは治さないといけないと思った」
C	「1対1でこういう感じで話すのは少し戸惑ったこともあった」
D	「大変だあー、自分については意外と人見知り」
E	「5分が長く感じしんどかった、話すの苦手、 <u>困ると笑ってごまかす、楽しくない時ほどよく笑う</u> 」
F	「かかわったことがない人とはどうすればよいかわからなくなりました、 <u>話をするのが苦手で相手から振ってもらってばかりだった</u> 」
G	「話の途中で恥ずかしくて下を向いていることもあった、ずっと相手を見て話せないと思った」
H	「人と話すの難しい、 <u>恥ずかしがり屋</u> でした、 <u>意外と楽しかった</u> 」
I	「どーしてよいかわからなかった、 <u>意外と喋れてると思った</u> 」

J	「話をしたことのない人と話すとき緊張した、 <u>すっごい思っていたより人見知りでした</u> 」
---	---

以上の10名については人間関係がポジティブになった、また今後の関係が良くなると思われる記述に累計していないが、記述（下線）からは、自己覚知にふれていると思われるものとして考えられることができる。

授業のねらいの一つである「自己覚知」につながるということも一部の学生ではあるが確認ができたと思われる。

なお、今回の研究について調査の限界があることは、初めに述べたが、今後さらに詳しく調査していく必要性を感じた。

4. 今後の課題

今後の課題として、授業を行う際に「学生は人間関係づくりが苦手であり特定の限られた仲間としか話をしていない。またコミュニケーション能力が低下している。」ということを念頭において授業を行っていかねばいけないと思われる。

そのうえで、どのようにすれば人間関係づくりやコミュニケーション能力を向上させられるかを考えなければいけない。

このようなコミュニケーション能力の向上のために必要であることを高松（2006）⁵⁾は「家族でありながらメールで会話する親子。友達のうちに遊びに行き、ばらばらにテレビゲームをして無言で遊ぶ子どもたち。さらに成人してなお、生身の女性とは付き合うことができず、マンガやアニメなどの二次元の世界やフィギュアやアイドルなどの世界に癒しや安らぎを求める人々。メイド喫茶などのバーチャルな世界に浸る人。」という現在の若者の様子を述べたうえで、その能力の向上について次のように述べている。

1、相手が自分の仲間うちではダメである。初対面の相手や、年齢や職業、置かれている環境などが自分とはまるで異質の相手との対話訓練でなければ能力の向上には効果が薄い。

2、パソコンや携帯電話を通したものではダメである。生身の血の通った相手を、目の前において直に行くものでなければ能力の向上には効果がない。機械はあくまでも、本物のコミュニケーションを補完する力しかなく、真のコミュニケーションにとって代われるものではない。道具を使ったコミュニケーションは、それ以前に直にふれあう対話がある場合にのみ、それを補う形で有効となるだろう。携帯メールやEメール、チャットだけでは、コミュニケーション能力は向上して行かない。メールが打てること自体や、単にインターネットや携帯でつながっているだけではコミュニケーションとは言えない。また、ごくごく普通に行うことができることをやり続けたところで能力の向上には結びつかない。これは、呼吸や歩行など、いくら繰り返しても上手くはならないのと同じである。しかし、より高度な呼吸法や歩行法は実は存在し、それを身につけるには訓練により鍛えるしかない。

(抜粋)

今回の授業におけるワークは、学生にとっては生身の人間とのふれあいの実践であったと考えられる。これらを踏まえて、授業の基礎的条件である肯定的な人間関係をつくる、またコミュニケーション能力を向上させる。このような取り組みを入学時から行い継続させることが必要であると思われる。

そして、授業において、「会話できる雰囲気をつくるのがいかに重要であるか」を考えなければいけない。学生の会話は時として授業の妨げになる。それが至極特定の仲間だけであること。パソコンや携帯電話を通して行われることが問題である。

いろいろな人と会話ができる機会をつくること。

自由に話ができる雰囲気をつくること。これらが授業を行う上で重要である。

また本学に入学する多様な学生に応じて、授業そのものの在り方を問うことも必要である。

保育者養成校における人材育成として授業でなすべきことは何なのか、2年間という期間でどのような人材を育てるのかを考えて授業を行うことが今後の大きな課題である。

5. 引用文献・参考文献

- 1) 「大学、短期大学、高等専門学校における学生支援取組状況に関する調査（平成22年度）」集計報告（単純集計）
2011（平成23）年6月
- 2) 独立行政法人 日本学生支援機構日本経団連「新卒採用に関するアンケート調査」（当該設問は2000年度（01年卒採用）から調査開始）アンケート調査結果（平成22年4月）
- 3) 高橋建夫・岡出美則・友添秀則・岩田靖（2010）
体育科教育学入門 大修館書店 p49
- 4) 高橋建夫・岡出美則・友添秀則・岩田靖（2010）
体育科教育学入門 大修館書店 p50
- 5) 高松正毅 高崎経済大学論集 第49巻 第2号 2006 p105～p114「現代のコミュニケーション環境とコミュニケーション論をめぐって」

注) コミュニケーション能力について、本稿では特に定義づけはしていない。よって対人関係における対話や交流が円滑であり人間関係を構築できる能力など広義にとらえている。

ピアスーパーバイザーからのコメント

「同内容・同方法」で展開している授業ではあるが、対象となる学生集団は異なる。授業は、教員と学生との「相互作用」によって成立することを改めて認識させられた実践報告である。「情緒的に開放された肯定的な人間関係づくり」「コミュニケーション能力の向上」は、教員にとって授業の基礎的条件であるとともに、学生自身にとっても、学生生活と卒業後の社会生活にとって基盤となるものであり、大学として入学時から継続的に取り組むべき課題である。この課題に対して、我々教員一人ひとりが日常の授業の中でどう取り組んでいったらよいか、示唆を与える実践報告である。

(担当：児童教育学科 岡崎 公典)